

三好京三

俺は先生



文藝春秋

三好京三 俺は先生



文藝春秋

著者略歴

昭和六年岩手県に生れる。
慶応義塾大学文学部（通信教育部）卒。昭和五十年、「子育てごっこ」で第四十一回文學界新人賞受賞後、昭和五十二年、同作で第七十六回直木賞受賞。著書に「子育てごっこ」「分校日記」「キャンパスの雨」「いのちの歌」「娘はばたけ」「冬の川」「早春の記憶」等がある。

俺は先生

昭和五十七年二月五日 第一刷

定価 千三百円

著者 三好京三 みやうきやうざう

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—三
電話 (〇三) 二六五—二二一

印刷所 大日本印刷
製本所 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替え致します

目次

(一) 帰還	5
(二) 山河	30
(三) 潮騒	47
(四) 新米教師	62
(五) 分室	96
(六) はまなす事件	130
(七) 仲間	147
(八) 恋心	165
(九) かなづかい	186

(十) 木枯	198
(十一) 村人	215
(十二) 早春	247
(十三) 子と妻と	274
(十四) 教育のしくみ	312
(十五) カマラード	334
(十六) 小森川の子	376
(十七) 澄んだ空	422
(十八) 新生	436

(十九) 新生	436
---------	-----

装 装
丁 画

花 森
村 田

広 純

俺
は
先
生

(一) 帰 還

薄ぐらい。暑くるしい。有蓋貨車の中には、若い航空士官学校生徒たちの、汗と体臭が熱っぽくもっている。馬の排泄物の、いがらっぽいようなにおいもまじりこんでいる。この貨車は、本来は軍馬輸送車なのだ。貨車一輛に、馬六頭が積みこまれる。今は馬の代わりに六十人の生徒がすし詰めになっていた。「六頭車だ」とある者が言った。まったく、最後部に連結されている、幹部用の三等客車にくらべれば、軍馬用の有蓋貨車は、六等車並みの待遇である。

朝鮮に近い満州の通化^{つうか}を出てから、四十時間近くになっている。高粱^{こうりょう}まじりの握り飯の給付を受けるときと、用便のときだけ、列車は停車した。有蓋貨車からあふれ出るように外にとび出すと、荷物をさげたり、子どもの手をひいたりして、南の方へ急ぐ日本人の群が必ず目に入った。

——どうもふしぎだ——

郷内哲也は有蓋車の壁に背を押しつけ、場所をとらぬように、軍刀を股にはさんだ膝をきつくかかこんでいた。眼玉がぎょろりと大きく、鼻梁が高い。

——あの日本人たちはどうみても難民だし、俺たちはといえば、まるで敗残兵だ——

哲也たち航空士官学校第二生徒隊は、本来ならば新京に近い公主嶺^{こうしゅりやう}の飛行場で、操縦訓練をするはずだったのだ。本州はアメリカの空襲がはげしく、とても飛行演習はできないというので、満州に向けて舞鶴を出港したのが昭和二十年八月五日である。日本海を航海しているさなか、ソ連機の襲撃を受けて、ソ連の参戦を知った。

新京には八月十四日に着いた。その日から、ふしぎなことばかりが続いている。新京の駅の停車場司令部に出頭した隊長がおおざめた顔で帰って来て、「帰校命令が出た」と告げたのだ。せっかく公主嶺飛行場の鼻先にまで来て、何もせずにもう帰るのだという。第二生徒隊の哲也たちはいちじるしく不満であったが、上官の命令には従うしかなかった。その日の夜に、これは「六頭車」ではなくて、客車に乗った。ソ連軍に追われた民間人や軍属がいっぱい乗っている列車である。

八月十五日の夜遅く、東通化という駅に降りた。そこにも飛行場があり、新通化飛行場と呼ばれている。

十六日は久方ぶりの休日であった。小川でよごれ物を洗ったり、水浴をしたりした。戦争の成り行きはまったくわからない。わからないままに、二十歳の若い肉体たちは、小川で思うさま水を浴び、深みを求めて泳いだ。

泳がない者が三名ほどいた。その者たちは、川の上流で、

満人が豚を洗っているのを見たのだそうである。水しぶきをあげている哲也たちの頭上で、味方のユングマンという松根油をたいて飛ぶドイツ製の飛行機が、虹のようなり声をあげて飛びかっていた。そのユングマンをふり仰ぎ、郷内哲也は、あしたから、この新通化飛行場で操縦訓練が始まるのかも知れない、と思った。隊長は帰校命令が出たと言ったが、それは変更されたのに違いない――。

ところがその夜、隊長はまたふしぎなことを言った。

「匪賊隊を編成し、長白山脈にこもる」

というのだ。どうやら、あこがれの操縦桿はとうとう握れないらしい。そして八月十七日、午前中にたしかに匪賊隊は編成されたが、午後、重ねて帰校命令が出た。学校は埼玉県豊岡である。

編成された匪賊隊は即座に解散され、十八日、ユングマンの格納されている新通化飛行場に心を残しながら、哲也たちは通化の駅まで移動した。そこから「六頭車」である行先は釜山と告げられていた。釜山行を告げるとき、隊長は、「デマにまどわされるな」と注意している。それは、戦況ははかばかしくはないが、日本が負けるということとは絶対にない。弱気のうわさがひろまるかも知れないが、そのようなものに心を動かされてはならないという意味に違いなかった。

哲也も、もちろん日本が負けるなど、思ってみたこともなかった。どのような状況になろうとも、最後の一兵まで

戦うのである。よほど前から、本土決戦が叫ばれている。いよいよのときには、秘密の新兵器が使われ、一挙に逆転、敵を殲滅する。神風も吹く。哲也はそう信じている。信じてはいるが、どうもようすが変だ。八月十四日以来、隊長の顔色が冴えない。どこか深いところで気落ちしているようなところがある。汽車から降りたときに見る避難民のようすも、ただごとならぬあわただしさを感じさせた。

日がよほど高くなったらしい。有蓋車の中の暑さは、うだるようである。隣の生徒が、こらえきれないように哲也の耳に口を寄せた。

「おい、やっぱり、日本は負けたんじゃないのか？」

哲也は八田というその生徒をにらみつけた。自分も疑心暗鬼になっているのだが、あからさまに日本が負けたと言われると腹が立った。それでも八田の立場を思いやり、押しこらした声で、

「負けるはずがない」と言った。

「しかし、おかしい」八田は秘密めかした眼を光らせた。この眼がもとから嫌いだったと、哲也は豊岡の学校時代を思い出した。

航空士官学校の見学のため、付近の女学校から、教師に引率されて生徒たちがやって来ることがあった。その女学生をちらと見て、

「おい、きょうも女学生の見学だな」と、作業中の哲也は隣の八田にささやいたことがある。

「うん」と八田はこたえたが、その夜の反省会で、八田は週番の者に、

「郷内哲也が女のことを言いました」と報告したのだ。航空士官学校では、酒、煙草、女が法度であった。酒を飲むな、煙草を吸うな、女の話はなおするな――。

哲也は禁を犯したことがなかった。父は、今は退役して京城にいるが、満州と朝鮮との国境警備にあたっていた、もと職業軍人である。教育は厳格をきわめた。

自分が女の話をしたと、八田が週番に報告したのを聞いて哲也は驚いた。「女学生が来たな」と言っただけではないか。

しかし、哲也は呼び出され、週番から烈しい往復ビンタを五つ六つくった。問答無用なのである。殴られて席にもどるとき、八田はさも氣持よさそうに哲也を流し目で見て唇をゆがめた。

あれは報告ではなくて告げ口だったと哲也は思っている。あのように些細なことを告げ口した八田が、今、日本は負けたらしいと、重大な陰口をきいているのだ。

「負けたのでなかったら、新京からは撤退しても、どこかで踏み止まって戦うんじゃないのか？ まっすぐ日本に帰されるというのが、どうもおかしい」

「本土決戦さ」と反撥をこめて哲也は言ったが、自信はゆらいでいた。

有蓋貨車の中の温度はさらに上昇を続け、すし詰めを生

徒たちの中にはうめきを洩らす者が出て来た。腰にさげている水筒は、全員竹筒である。誰もがその竹筒の水は飲み干していた。次に停車するのは京城ということである。そこに着くまで、渴きも、便意もこらえなければならぬ。粗悪な高粱飯で、下痢を起こしている者が多くいた。

カーキ色の軍衣はもちろん、下袴も略帽も汗で濡れそぼっている。

汽車はよほど大きな駅にさしかかったらしい。何度も何度も線路を踏み変える車輪の音がした。群衆のざわめきらしいものも聞こえた。

「平壤あたりか？」哲也が京城生れであることを知っている八田が訊いた。

「そうだろう。かかった時間からみて、おそらく平壤だ」

「待てー」八田がふいに緊張して聞き耳をたてた。外の群衆の声を聞きとろうとしているのだった。

「マンセイと叫んでいるぞ！ 朝鮮独立、マンセイだ！」

八田が思わず叫んだ声を聞きつけ、うなり声や私語でざわついていた車内が静まった。不安げな眼と、とがめる眼が八田に集中した。

「くり返すな！」すばやく哲也は八田に耳うちした。女の話をしたところではない。八田は反戦的非国民のことばを口にしたのだ。車内の者たちが外に神経を向けたとき、汽車は駅を遠ざかったらしい。群衆の声は聞こえなかった。

思いつき、哲也は窮屈な中を身じろいで背負い袋をおろ

した。そして中から便箋を取り出し、ペンを走らせた。

「今、日本へ帰る汽車中です。お父様、お母様いかがお過ごしですか。弟、妹たちは元気に学校に通っておりますか……」

京城郊外にいる家族への手紙であった。

哲也の弟妹は七人いた。哲也が八人兄弟のかしらである。父の久悦は、退役後、京城郊外の牧場で事務の仕事に就いていた。

一年前、昭和十九年の三月に予科士官学校に入学して以来、哲也は家族に会っていない。今、列車がその家族たちのいる京城に近づいていると思うと、胸が高鳴った。

「お知らせのしようありませんが、昭和二十年八月二十日、ただ今、自分は京城の駅を通過しようとしております。おそらく、本土において鬼畜米軍と決戦ということになります。七生報国、お父様のお名を恥ずかしめぬ最期をとげる覚悟です……」

宛名を書き、切手を貼った。ふつうであれば、家族への手紙は上官に検閲を受けなければならない。しかし、今までの停車のようすを見ると、ひそかに手紙を投函することぐらいはできそうであった。幹部たちの監視の眼もどこか緊張感がない。

手紙を書き終えた哲也を見て、八田がまた耳に口を寄せた。

「逃げたらいいよ」

「なに？」と哲也は八田を見返した。

「貴様の家は京城の駅からそう遠くはないだろう。どうやら日本は負けた。そうすると、軍人や俺たち士官候補生は虐殺されるよ。逃げた方がいい」

「めったなことを言うな」八田をにらみつけてから哲也はまわりのようすをうかがった。さいわい、二人の会話の内容に気づいている者はなかった。

「逃げろ。できたら俺を連れて」八田はあきらめずに哲也の耳にささやいた。

「聞きたくない」哲也は体を寄せてくる八田を押しやっていた。京城中学から陸軍予科士官学校に入った生徒は十人ほどいた。しかし、航空士官学校にすんだのは哲也だけで、他の者は歩兵科や砲兵科にまわっている。その者たちは、内地に残って訓練を受けているのだった。京城中学を巣立った仲間たちが内地でがんばっているというのに、自分だけが京城を目の前にしたからと言って逃亡するというようなことは、死んでもやるわけにはいかない。そばにいる八田がつくづくおぞましかった。

汽車がスピードをゆるめた。車輪がガタコトと線路を踏みかえた。いよいよ京城の駅だった。有蓋車の中に、それ待ちかねていたような安堵のどよめきが湧いた。

汽車が停止した。とたんに、外からはじけるような歓呼の声が聞こえた。

「マンセイー」「マンセイー」

八田が平壤駅で聞いたというマンセイは、空耳ではなかったのだ。戸口にいた者が重い戸を押しひらいた。真夏の陽光がさしこみ、まぶしく旗の乱舞しているのが見えた。日章旗ではなかった。丸のまわりに黒の印のついた、朝鮮の太極旗であった。

「マンセイ！」「マンセイ！」「朝鮮独立マンセイ！」

太極旗を手にした群衆は、声を限りに叫んでいる。外気を求めて降りたつた士官候補生たちを、彼等は異様に光る眼でにらんでいた。中には棍棒を持ち、候補生たちに殴りかかろうとでもするように、威嚇的にふり上げている者もある。思いがけない光景に戸まどいながら、候補生たちは食糧の給付を受け、腹をこわしている者は便所に走った。哲也は雑踏の中を泳ぐようにして駅の改札口に行った。

朝鮮人の駅員がいた。

「済まないが、この手紙をポストに投げこんでください」早口で言つて手紙を押しつけた。駅員は初め怪訝そうであったが、やがて飲みこみ顔ににっと笑った。

あわただしく候補生たちを貨車に積みこむと、汽車は動き出した。スピードが出ないうち、戸はしばらく開けられたままであった。詰めこまれた候補生たちに向かい、群衆はひととき高い叫び声をあげた。

「マンセイ！」「マンセイ！」「朝鮮独立マンセイ！」

熱狂的なその声は、哲也たちが故郷を出るときに浴びた、激励と祝福に満ちた万歳とは明らかに違っていた。彼等は、

興奮のあまり、酔っているようである。眼光は哲也たちを非難し、あざけているように見えた。

「やっぱり日本は負けたんだ」そばでつぶやいた者がある。こんどは八田ではなかった。クラスの中でもとびぬけた秀才と目されている生徒であった。

汽車は銜並を抜けた。広漠たる赤土の向こうに、京城飛行場が見えた。ユングマンのほか、爆撃機や戦闘機が数多く並んでいる。

——負けやしない——

心の底で哲也は言つた。京城の飛行場は、見るからに悠然としている。満州は気ぜわしく騒然としていたが、京城飛行場はあのように泰然自若、戦力もまだ豊かなのだ。

汽車はしだいにスピードを速めた。哲也の気持をとぎすように戸がしめられた。それまで立っていた候補生たちは、互いにまわりに気がねしながら腰をおろした。

塩をまぶしたさゆうり一切れと、相変わらぬ高梁飯の屋敷ではあったが、空腹はひとまずおさまっている。用便も済まし、外気も吸った。しかし、それぞれが膝をかかえてすわった暗い有蓋車の中の空気は、重苦しくよんでいる。精気がなかった。ひそひそ話がそちこちでかわされている。否応なしに日本の敗戦をさとした者が多いようであった。

——負けはしない——

私語に加わらず、哲也は軍刀を抱いて眼をつむった。

——どのような事態になろうとも、俺は上官の指示がない限り、軽々しいことは言わぬ——

臉の裏に、父の勤めているひろびろとした牧場が浮かんだ。

その牧場で馬や牛を見ながら、哲也は小学校時代、よく兵隊ごっこをした。ただの陣取りのような兵隊ごっこをしていると、父は手製の地図を持って事務所からあらわれ、哲也たちを指導したものである。

「いいか。でたためな斬り合いは戦争ではない。どこそこ敵がいる。そのためにはどこから砲撃するか、どこをどうまわって背後から攻めこむとか、計画を持たなくてはならない。これを見なさい」

差し出す父の地図には、牧場の周囲の地勢がこまかく書かれてあり、敵陣と味方の陣が記入されていた。

「どうだ。ここに敵がいる。それを何の準備もなくただ走って行ったらたちまちズドンだべえ。戦わないうちに戦死だ」

そして、ハッハアとさも楽しそうに笑った。

父は東北の農家出身で、そのため時おりことばに東北弁がまじりこむのだった。生家は豪農といってよかったが、家督の兄の財産を減らすのは本意でないと、背が小さいのにみずから二等兵からたき上げる職業軍人になったのだ。下士官で終わった父久悦は、長男の哲也には将校になって

もらいたいという願いがあったのに違いない。それで、地図持ちの兵隊ごっこでは、哲也に将校の役割を教え、常々、目下のものをいたわるよう諭していた。

久悦は正直でまじめな軍人であったが、一度だけ営倉入りをしたことがあるという。鴨緑江の岸辺の、恵山鎮というところで国境警備にあたっていたとき、部下がややまって隊の痰壺をこわしたというのだ。部下が処罰されることを気づかった久悦は、町へ出て同じような痰壺を買い求め、それを代わりに置いて何食わぬ顔をしていた。ところがそれがばれたのだ。久悦は叱責を受け、三日間営倉に入れられた。部下のために営倉入りしたのに、久悦はこれをいたく恥としていたらしい。つぎつぎに生まれた八人の子どもにはひた隠しにして、このことは哲也が予科士官学校に入學するとき、母のトセから聞いた。母は母で、父の部下を思いやる心を、息子に知らせたかったのであろう。

久悦は、また、人を出し抜くような抜け駆けもたいへん嫌いであつた。こおった鴨緑江を往復する、駐屯部隊のスケート大会があつたそうである。そのとき、号砲と共に各選手は勢いこんでスタートしたが、久悦は急がなかった。小柄なからだを前かがみにし、手を腰の後に組んで、しごくのんびりと滑り出したのだそうだ。たちまちみんなから遅れた久悦は、小柄なせいもあってひどく目立った。応援席からは失笑が湧いた。結婚したての母のトセは、恥ずかしくて顔があげられなかったという。やがて選手の群は豆

粒のように小さくなり、誰が誰か、判別ができなくなった。トセは、選手たちが戻って来る先に、よほど宿舎に帰ってしまおうかと思つたそうである。ところが先頭を切つて戻つて来たのは、のんびり屋の久悦だつたというのだ。氣負つて先を急いだ若い将校や兵たちは、息が続かなくて落伍してしまつた者が多いという。

軍隊の中で古参の久悦は、鴨緑江の氷上レースが耐久競技であることを知つていたのかも知れないが、それにしてものんびりした性格なのである。急がない。争わない。結婚したばかりの母のトセは、久悦の悠長すぎる性格に呆れ氣味だったが、この鴨緑江レースで久悦を見直したという。一見のんきに見えるがねばり強く、自分の信念は曲げない男であつたのだ。

哲也が小学生になるとき、久悦は退役して京城の牧場におちついてゐた。久悦は、哲也が京城の小学校に入学した途端、「教室では手をあげるな」と命じた。なぜそのようなことを言われるのか、小学生の哲也はわからなかつた。しかし、父のいいつけなのでその通りにした。

ところが担任教師は不満である。問題が解けているのにこの子は手をあげない。哲也は毎日のように教師になぜ拳手をしないのかとなじられては泣いて帰つた。それでも久悦は方針をまげない。息子が人先にわかつたことを鼻にかけ、ハイハイと誇らしげに手をあげるのを、あさましく恥ずかしいと思ひこんでいたようである。哲也が泣いて帰つ

ても、「これからも、手はあげるな」と言つた。

授業時間に手はあげなかつたが、哲也は級長にされた。もの言わぬ生徒ながら、ペーパーテストはいつも百点なのだ。しかし、号令がかけれられない。久悦の指導は、兵隊ごっこでは将校の役割を教えるが、学校へ行つたならば目立つな、というのである。矛盾しているようだが久悦はこの自分の方針を疑わない。

号令をかけなければならぬとき、哲也はいつも父親の顔を思い出した。卵型の小さな顔で眉毛が垂れさがり、ふだんは笑みをたたえた柔和な顔なのだが、言いつけにそむくとこわいのである。小さな体のどこから出るかと思われするような甲高い声で、「出て行きなさい」と叫ぶ。親爺の癪癪というよりは、上官の命令のような威厳を、その怒声は持つてゐた。哲也や弟妹たちは家から閉め出され、牧場の馬を見ながら長い間立ちつくさなければならぬ。

そのような父が、学校へ行つたら控え目にするよう、口ぐせに言うのである。哲也は級長のくせに号令がかけれられない。かけろと言われてもじもじしている。担任教師がいらいだつ。級友たちがあざ笑う。あぐく哲也は泣いてしまふのであつた。泣き虫級長と言われた。生まれたときは、眼だけが大きく真っ黒な顔でやせていたから、近隣の朝鮮人たちは、メッカントップリと呼んだという。メッカントップリの大きな目玉は、教科書を読むときは鋭く輝いたが、他は涙をたたえていることが多かつたのである。

小学校五年生になったとき、哲也はようやく級長という役目に慣れていた。このころになると、教室で手をあげるなどという父の指導は、人先に手をあげず、みんなが大部分手をあげたあと、それを見渡してからゆっくりあげるように、ということだったこともなかった。

人を見渡すのを任務と心得た哲也は、近所の朝鮮人が極端に貧しいことに気づいた。暮れに父が餅をついていると、みすばらしいなりをして、朝鮮の子どもたちが見に行ってくるのである。母のトセは、そのような子どもたちにおふかしを分けてやったり、つきたての餅を食べさせたりしたが、子どもたちの中には、それでも足らずに素速く臼に手を入れて餅を千切りとり、背中をまるくして逃げて行く者もあった。哲也は、正月に餅を食べることのできない人間がいるのだ、と思った。自分たちだけが、安閑と雑煮をむさばってはいられない。

近所に同じクラスの副級長をしている友だちがいた。副級長は字がうまかった。哲也はバケツを借り集め、それをきれいに洗った。そして、副級長から半紙に筆で「同情餅」と書いてもらって貼った。それから仲間を呼び集め、牧場勤務の日本人や朝鮮人の家々をまわって、

「お正月を祝えない人たちのために、餅をください」とおねがいをした。餅をもらって歩きながら、哲也はあることに気づいていた。門構えがrippで、秋田犬とかシェパードとか、こわい犬を飼っているような金持ちの家では、それ

が日本人の家でも朝鮮人の家でも、餅をくれないのである。貧しい人のために餅は集めているのだから、金持ちの人こそ気前よく分けてくれるものだ、と、少年の哲也は思っていたのだ。五つほどのバケツにいっぱいになった餅は、正月を祝えない家よりは少しましな、ちょうど哲也の家ぐらいの暮し向きの家庭から大部分が集まった。

哲也たちは、その餅を京城市内の警察に持って行った。警察官は日本人だった。「さすが日本男児だ」とほめてくれた。よいことをしたのだと、哲也は晴れがましかった。仲間たちも浮かれた。

京城の市街地から牧場までは、六キロあった。しかし、学校にもその道のりを歩いて通っているのだから、いくら遠くても平気であった。哲也たちは牧場まで、唱歌をうたって帰った。

ところが明けて元日の四方拝の日である。哲也は副級長と二人、職員室に呼ばれた。担任は新聞の記事をさし示して、お前たちはこのようなことをしたのか、と訊いた。ちらと見た見出しには、

日本人小学生の善意貧しい朝鮮人家庭を救う

というようなことが書かれていた。哲也は目立ってしまった、と思った。四方拝の式の最中に、全校児童の前で発表されたりしたらどうしよう――。

しかし、担任は哲也たちをほめるために職員室に呼んだのではなく、こわい顔で二人を見おろすと、

「もうこのようなことはしないように」と言った。

「朝鮮人なんかにはかまうな」

哲也は水を浴びせられたような気持ちになった。父の久悦から諭されているばかりではなく、修身の時間にも、人には親切にしなければいけないということは教わっているのであった。四方拝の式の間中、哲也は心が重かった。

高台にある学校から、坂道をおりて帰りながら、このことは父にただしてみなければならぬと思った。それまで、担任の教師について、告げ口めいたことを親に言ったことはなかった。しかし、「同情餅」に関しては、父も大いによいことだとほめてくれていたのだ。「朝鮮人にかまうな」と言われた心の傷は、そのような父にもう一度自分たちの行為を認めてもらわなければ、おさまりがつかないのだった。

坂道をおり切ったところで、思いがけずその父に出会った。父は特務曹長時代の正式の服装をしている。軍刀もさげている。にわかにたのもしく思われ、駆け寄って、

「お父様、いっしょに帰ろう」とすがった。

「ああ、そうするべ。しかし、神宮参拝を終えてからだぞ」

「神宮？」

「そうだ」

久悦は京城の市街地に向け、悠然と歩き出した。背が小さいのに、大股で胸を張って歩く。

友だちと別れ、急いであとを追った。道すがら、哲也は担任から「同情餅」のことで叱られたことを告げた。久悦は正面を向いたまま歩きながら、

「元日早々、弱音を吐くな」と言った。

「これからするなというのなら、しなければいい」

「しかし、同情餅はまずしい人を思うからやっただけで、親切というのは……」

「くだい。きようはめでたい元日だ。お父様のように、男らしく堂々と胸を張って歩け」

仕方なしに哲也は胸を張った。そして、父に負けないように大股で歩いた。兵隊の行進のような、歩調をとった歩き方になった。

街中に入ると、正月の晴れ着を着飾った人たちが親子をじろじろ見た。父と一緒に歩くと、どうしてもこのような恥ずかしい思いをすることになると、哲也は父について来たことを後悔し始めていた。父は、ふだんは日曜日に神宮参拝をするのである。そして、社前で大声で万歳を叫ぶ。まわりの人たちが驚いて、そのような父を見世物でも見るようにみつめるから、哲也も弟妹たちも、父の神宮まわりのお供は敬遠していたのだ。

その日は元日であった。礼装もしている。久悦は、ここを先途と万歳を三唱するであろう。それを考えると、哲也は張った胸もしだいにちぢこまる気がした。

久悦が日曜日にまわるのは、朝鮮神宮、京城神社、それ

から天満宮であつた。長い長い石段をのぼらなければならぬ場合もあるので、よい子どもたちはお供をいやがるのである。石段をのぼりながら、久悦は哲也の頭を撫でた。「牧場の近くのお宮まいりには、子どもたちはみんなついで歩いたんだがな。神宮まわりと聞いたら逃げてしまった。しかし、跡取りのお前とこうして一緒になれるというのも、神様の引き合わせというものだべえ。郷内家は万々歳だ」

しかし哲也は、弟妹たちには得をされたと思つてゐる。じき下の妹の雅子は小学校二年生である。その下の弟の敏也は六歳でこの春から小学生。年子の尚子が五歳で、この三人と哲也が神宮まわりを誘われるのであつた。家にはこのほか三歳の千賀子と生まれたばかりの直也がいる。この時点では六人兄妹だ。

社前にぬかずくと、久悦はもつたいらしくおひねりを賽銭箱に投げ入れ、かしわ手をうって何ごとかをつぶやきながら長いお祈りを捧げた。かんたんに礼拝を終わつた哲也は手持ちぶさたであつた。父の仰々しく長い礼拝も、そろそろ参拝客の注目を集めると思つてゐる。何分間か瞑目したのち、久悦はあらためて姿勢をただした。そして、社殿の奥に敬虔なまなざしを投げた。いよいよ始まる。

「天皇陛下アッ」と久悦は金切り声をあげた。一息入れ、「万歳ッ」小さい体を天につき上げるように伸ばしながら、両腕を高く差し上げた。

「万歳ッ」「万歳ッ」律義に三唱する。

哲也は人ごみの中に逃げた。参拝客の中には、これにまことに礼儀正しいことであると、心得顔に行き過ぎる者もあつたが、多くの者は物見高い顔で見物している。

久悦の万歳三唱は、これで終わるのではなかつた。次に、「大日本帝国ウツ」とどなった。「万歳ッ」「万歳ッ」「万歳ッ」

哲也は耳をふさぎたい思ひである。父親はたしかに日本人として正しいことをやつてゐる。それはよくわかつた。しかし、正しいと共に、どうも恥も外聞もないのである。大日本帝国が終わつても、久悦は社前から去ろうとしない。まだ神社の奥をにらんでゐる。固く結んだ唇がひらいた。

「京畿道オツ」と久悦は叫んだ。次いで、

「京城府ウツ」

哲也はおや、と思つた。今まで聞いた父の万歳に、これは含まれたことがないのだった。

「万歳ッ」「万歳ッ」「万歳ッ」

これも久悦はきちんと三唱した。父は朝鮮の人たちを好きなのだ、と哲也は思つた。あるいはこの万歳で、父は自分の「同情餅」の行為をもう一度しっかり認め直してこれているのかも知れない――。

どこの社でも、天皇陛下と大日本帝国と、京畿道京城府の万歳を三唱して、久悦は哲也といっしょに帰途についた。街並を過ぎると、道ばたや藁ぶきの民家のそばに、ひよ